



Title	堂友會記事
Author(s)	酒井, 全太郎
Citation	懐徳. 1942, 20, p. 64-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

滿腔ノ謝意トヲ表ス、冀クハ當事者各位、倍々協心戮力、愈々本會ノ目的達成ニ努メ、以テ皇恩ノ萬一ニ酬イ奉ランコトヲ、一言以テ祝辭トス、

堂友會記事

幹事 酒井全太郎

▲昭和十六年十月十一日 恒例により會員一同、本堂祭典に奉仕する、會誌第十九號を發行する。

▲昭和十七年一月一日 年賀會あり。會員數名參堂、先師儒諸先生の神位を拜す。

▲三月一日 天沼俊一先生の御指導による醍醐方面見學會を催す、三寶院の殿舎唐門、藤

原時代初期の建築である國寶五重塔の内部を拜觀し、次で京都八阪神社に至りて塔を拜觀し、午後五時頃解散した。參加者五十名、盛會であつた。

▲五月十日 澤瀉久孝先生御指導による吉野宮瀧方面の萬葉遺蹟探勝會を催し、大鐵阿部野驛發、大和上市驛下車、借切バスを驅りて菜摘に至り、紙漉などを見つゝ吉野川上流に至り、川原にて休息の後、たきつ瀬に若葉はぬれて河鹿の聲もさやけき宮瀧附近の遺蹟を探勝し、上市へ歸りて解散する。一行十數名

▲五月二十四日 天沼先生の御指導による大和室生寺見學會を催し、平安朝前期の建築である五重塔や金堂など拜觀する、參加者約四十名、

▲六月七日 天沼先生御指導による宇治方面見學會を催し、平等院、宇治上神社の建築を拜觀する、參加者三十餘名、

▲六月十三日 京都白糸瀧洛樂園にて會員有志の發起に係る中井木菟麻呂先生米壽祝福會を催す。參加者三十餘名、老楓の若葉鬱蒼と茂り、木の間より遙かに洛北の町家が眺められ溪谷泉石の間に、紅や白の躑躅が咲く、先づ吉田銳雄先生が祝福の詞をのべられ、中井先生の答辭あり、盃を舉げて御健康を祝し晝餐を共にした後、舊懷徳堂を聽く茶話會を開く、興いたるや中井先生は莞爾として音吐朗々、先儒講義の眞似をせられたり、手をついて挨拶の眞似をされたりして、なかなかの御元氣である。三時三十分頃一旦閉會し、よ

もやまの話盡きざるも、四時三十分頃迎ひのタクシー來ると告ぐるまゝ解散する、

▲六月二十一日 天沼先生御指導による大和榮山寺見學會を催す、天王寺驛發、大和五條驛下車、清らかな溪流の岸に建てられたる榮山寺に到着、心づくしの壽司や饅頭の饗を受け、我國最古の八角圓堂や鐘樓、石燈籠、石塔、本堂を拜觀して歸阪する、參加者約五十名、雲水にて有志十數名、先生と晚餐をともにする、

▲七月十九日 源豐宗先生御指導による暑さ克服の京都建仁寺、六波羅密寺見學會を催す、京都四條停留場に集合し、建仁寺、六波羅密寺に至り、繪畫佛像彫刻多數を拜觀する、六波羅密寺では特に祕佛の拜觀を許さる、建

仁寺にて晝食後解散する、參加者二十餘名、

▲九月二十七日 天沼先生の御指導による京

都南禪寺と銀閣寺との見學會を催す、參加者

四十名、

編輯を終へて

幹事 山本 楯 信

十二月八日のあさぼらは來た、眞つ赤を生れて初めての偉大な太陽をみた、すべての人たちは美しき感激の中に立つた、日本のすべての人が日本人としての本當のたましひをつかんだ、米英に向つて開戦最初の報に接し、來るべきものが來た。東亞の興廢まさに此の一戦にありと、衾を蹴つて起き、潔齋して神棚におひか

りを獻じ、清淨潔白な心に拍手をうつて、祖國日本の勝利を祈願した、同日正午には、宣戰の詔勅が降下した。二千六百第一年の最後に宣戰が布告されたのである、近衛内閣總辭職の報に接し、此の未曾有の重大時局に際し、大命を拜して、帝國不動の國是を遂行して世界平和に寄與し、皇國三千年の歴史をいやが上にも光輝あらしめんと誓はれた東條首相の鐵石の意志は、果敢なる實行によつて示され、日本があかくなつた氣がした。國民は喜びと勇みとを以て勝ち抜く確信と、國に殉ずるたくましい覺悟が出來た。今こそ御奉公のしどきである。今こそ生くる甲斐あり、死ぬる甲斐ある千載一遇の好機であることがわかり、壯烈鬼神をなかしめる日本人の永遠の生くる道が自ら會得される。